

---

# 魔法少女リリカルなのはdarkside

ひらこう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはdarkside

### 【Nコード】

N2686P

### 【作者名】

ひらこう

### 【あらすじ】

機動六課が設立する数ヶ月前

無限書庫司書長『ユーノ・スクライア』は突然この世を去った

彼の死の裏に潜むのは管理局の闇

真実を知った時、『高町なのは』は復讐の鬼となる！

## プロローグ カリムの預言（前書き）

はじめまして『ひらこう』と申します

今回このサイトで小説を書かせてもらう事になりました

この話はハッキリ言って暗いです

原作キャラがいきなり死にます

だから、賛否両論あると思いますが暖かい目で見ていただけると幸いです

とりあえずまずはプロローグです

## プロローグ カリムの預言

聖王教会

カリム「うーん、これは・・・」

理事『カリム・グラシア』は自らのレアスキルである預言が書かれた紙を見て悩んでいた

傲慢なる法の番人

自らの欲のために未来ある青年の命を奪う

しかし、それは愚行の一手

青年の死に悲しみ真実を知った白き翼

悲しみを怒りに変え復讐鬼となる

闇の力を受け入れ白き翼を真っ赤に染める

全ては傲慢たる法の番人の所為なり

カリム「どういう意味かしら・・・」

カリムの頭には？マークが浮かんでいた

しかし、後日彼女は理解する

この預言が管理局の崩壊を意味する事を・・・

## プロローグ カリムの預言（後書き）

さて、プロローグはカリムの預言から始めさせてもらいました

預言の方は大まかな展開だと思ってくだされば良いです

では次の更新で

## 第1話 ある日突然

機動六課が設立する数ヶ月前

ミッドチルダ クラナガンの中心部

人通りの多い道を無限書庫司書長『ユーノ・スクライア』は歩いて  
いた

ユーノ「久しぶりに来たけど相変わらず賑やかいなあ」

この日はたまたまOFFで生活用品を買いに来ていた

本当は想い人である『高町なのは』と歩きたかった

しかし、彼女は教導で忙しくなかなかスケジュールが合わない

ユーノも無限書庫での仕事や遺跡の発掘など多忙である

ユーノ「良いんだか悪いんだかわからないよ・・・」

ユーノは苦笑しながら呟いた

と

ドンッ！

誰かとぶつかった

ユーノ「あ、すいま．．．」

謝ろうとした

しかし、腹部に激痛が走った

腹を見ると

ユーノ「なっ．．．」

真っ赤に染まっていた

ユーノ「．．．やっぱり、勘づいていたのか．．．」

犯人はユーノの中ではわかっていた

そのまま膝から崩れ落ちるように倒れた

ユーノ「．．．はあはあ、．．．なのは、管理．．．局には．．．」

そのまま意識は遠退いていった



## 第2話 ユーノの死（前書き）

ダークサイド、第2話です

徐々に歯車が狂っていきます

## 第2話 ユーノの死

その日、高町なのははいつも通り仕事を終えて自宅でゆっくりしていた

なのは「暫くしたら六課も始まるし、今のうちにゆっくりしておこうかな」

そう言ってテレビのニュースを見ていた

アナウンサー『続いてのニュースです、今日昼間クラナガン都市部にて傷害事件が発生しました。被害者は時空管理局無限書庫司書長『ユーノ・スクライア』さんで……』

ビタッ

なのはの動きが固まった

なのは「……え？」

今のは聞き間違いでは無いのか

なのはは耳を疑った

すると電話がなった

ピッ

なのは「もしもし？」

はやて『私やつ！なのはちゃんニュース見たか！？』

電話の相手は『八神はやて』

なのは「うっ、うん！でもまさか……」

はやて『私も信じられへんよ、今から病院に行くからなのはちゃんも一緒に行こうっ！！』

なのは「うん、わかったよ！」

なのははすぐに制服に着替えはじめた

ミッドチルダ総合病院

手術室の前にはかつて一緒に戦っていた仲間達がすでに来ていた

フェイト「なのはっ！」

『フェイト・T・ハラオウン』がなのはに声をかける

なのは「ユ、ユーノ君はっ！？」

クロノ「今、手術中だが……かなり厳しいらしい」

なのは「そんな……」

場が重い雰囲気に使まれていた

その時、手術室のランプが消え医者が出てきた

なのは「せ、先生っ!? ユーノ君はっ!?」

医者「……………なんとか頑張ってみましたか……………申し訳ありません」

医者は苦しい表情で残酷な結果を示した

フェイト「嘘……………」

はやて「そんな……………」

全員が茫然としていた

そして

なのは「う、うわああああああん!!」

なのはが大号泣した

数日後、ユーノの葬儀が行われた

葬儀にはユーノと親交のあった大学教授などがやってきた

もちろん管理局からも上層部の何人かがやって来ていた

なのは「……ユーノ君」

そんな中なのは上の空だった

改めて自分にとってユーノが如何に大切な存在だったかを思い知った

ユーノが亡くなった日の翌日も仕事だったが大事をとって休んだ

それから今日までなのは一切外には出なかった、それどころか誰にも会おうとしなかった

フェイト「なのは、大丈夫かな……」

はやて「大丈夫ちゃうな、今のままじゃ六課の教導は無理やな、ちよっと遅らせた方がええかもしれん」

クロノ「はやて、フェイト、ちよつといいか？」

フェイト「どうしたの？クロノ」

クロノ「ユーノを殺した犯人なんだが……、どうも怪しいんだ」

はやて「怪しいて何が？」

クロノ「捜査があまり進んでいないんだ、それに管理局はこの件を早く終わらせようとしている」

フェイト「なんでっ！？人が一人死んでるんだよっ！？」

クロノ「しっ！声が大きい！……とにかく僕はユーノが殺され

た事件に大きな何かが関わっているとは思えないんだ・・・」

そう言って、クロノはなのはを見る

相変わらず上の空状態だった

クロノ「君達も気をつけてくれ」

はやて「わかったわ」

フェイト「うん、クロノも気をつけてね」

その日はそれで全てが終わった

## 第2話 ユーノの死（後書き）

第2話でした

僕は完璧な人間なんていない、と思っています

人間失って大事な物がわかるんです

### 第3話 ユーノの思い、なのはの決意（前書き）

第3話です

ユーノが殺された理由がわかります



### 第3話 ユーノの思い、なのはの決意

ユーノの死から数日後

なのはは仕事に復帰したが今までとはやはり違っていた

ボーツとする事が多くなり自主訓練をするように、と生徒達に指導する事が度々あった

誰が見ても抜け殻状態だった

そんな日々が続いたある日

ピンポーン

なのは「はい？」

なのはの家のインターホンがなり玄関を開けると宅急便が来ていた

宅急便「お届けものです」

なのは「ありがとうございます」

伝票を見ると差出人はスクライア一族の長老だった

小包と同封されていた手紙には、葬儀の時のお礼とユーノがお世話になった為、形見として持っていてほしい、との事

箱に入っていたのは、なのはがあげたりボンと記録用のディスクだ

った

なのは「ユーノ君……」

改めてユーノの死を感じてしまい涙がポロポロと出てきてしまう

なのは「もうひとつは……記録用のディスク？ レイジングハート」

自らのデバイス『レイジングハート』にセットして映像が映し出された

ユーノ『なのは』

なのは「ユーノ君っ！」

映像に映し出されたのはユーノの姿だった

ユーノ『コレを見ているという事は僕はもうこの世にいないかもしれない、だから、コレは遺言だと思ってほしい』

なのは「ユーノ君……、自分が死ぬ事を知っていたの？」

なのはは驚いていた、ユーノが自分の死を確信していた事を

ユーノ『僕は機動六課設立の為に色々調べていたんだ、その時に僕は管理局の闇を知ってしまった……』

なのは「管理局の……闇？」

ユーノ『管理局の上層部は裏で違法な人体実験や薬品開発、そして犯罪組織と手を組んでいたんだ』

なのは「ええっ!？」

ユーノ『僕はこの事実を知った時、一番に思ったのはなのは、君の事だった……。なのはを魔法の世界、管理局に入れさせたのは僕だ、だから責任をとらなきゃいけない、僕は証拠を持って内部告発をするつもりだ、その証拠はミッドチルダ銀行の金庫に保管してある、もし……。僕に何かあったら、なのは君に頼むよ』

なのは「私に……」

ユーノ『最後に言わせてほしい……。僕はなのはの事が好きだ』

そこで映像は終わった

マスター……

RH

なのは「ユーノ君……。とりあえず銀行に行ってみよう」翌日

なのはは銀行に行きユーノの隠し金庫の中身を拝見した

なのは「ホントに管理局は悪い事してたのかな……。?」

なのはは少し疑念を持っていた

管理局がそんな事するはずがない

しかし、なのはの希望は打ち碎かれた

なのは「そんな・・・」

なのはは資料を見て愕然とした

そこには違法研究のデータ、犯罪組織にいくら金を渡しているか、  
などが事細かく書かれていた

なのは「私は・・・こんな組織のために・・・」

騙されていた

なのはは完全に信じきっていた自分が余りにもバカに見えて

情けなくて泣きたくなった

今度は悔し涙

管理局を疑わなかった自分への腹ただしさ

自分の了見の狭さの情けなさ

なのはは思った

ユーノを殺したのは管理局である、と

少しずつ、なのはの心の中に怒りが沸いてきた

なのは「レイジングハート・・・、私は」

RH（構いません、マスター。私は地獄の底までもマスターについていきます）

なのは「ありがとう……、レイジングハート……」

決意は固まった

ユーノを殺した管理局への復讐

なのは「私は……管理局を許さない！」

### 第3話 ユーノの思い、なのはの決意（後書き）

第3話でした

この時はまだ、なのはは『復讐鬼』にはなっていません

まだ入口に立った感じです

## 第4話 消えたなのは（前書き）

第4話です

今回はなのはは出てきません

## 第4話 消えたなのは

なのはが決意して数日後。

なのはの家の前にはフェイトとはやての姿があった。

「なのは、まだ落ち込んでるのかなあ」

「どうなんやろ、教導にも出てないゆうし……」

二人は教導隊の隊長からなのはが来ていない事を知らされた。

そこで、心配になって見に来たのだが……。

ピンポン

インターフォンを押しても返事は返ってこない。

試しにドアノブに手をかけてみる

ガチャ

「開いてる？」

「こういうので、ようドラマで遺体を発見するシチュエーションやね」

「変なこと言わないでよ……、  
なのは、入るよ？」



はやてのジョークにフェイトは苦笑いをしながら部屋の中に入っていった。

「やっぱり……、おらへんみたいやねえ」

「何処に行っちゃったんだろう…… て、あれ？」

フェイトは机の上に置いてあった手紙に気づいた

「手紙？ ……はやてっ！」

「フェイトちゃん、どないしたんや？」

フェイトは慌てて手紙を見せた

へフェイトちゃん、はやてちゃんへ

これを読んでる、という事は私はもうそこにはいない、という事だよね？

私はユーノ君を殺した犯人がわかりました。

犯人は『時空管理局』です。

私は管理局が許せません。

だから、復讐します。

これは友達として最後のお願いです。

管理局を辞めてください。

でないと、私はフェイトちゃん達を敵とみなし殺すかもしれません。

次に会う時は、私は変わっているかもしれません。

さよなら。

高町なのは

「これって……」

「嘘やろ……、      なのはちゃんが敵になるなんて……」

手紙を読んだ二人は信じられなかった。

「とりあえず、クロノに相談しよう！」

「せやな、それに桃子さん達にも連絡しなきゃあかん」

二人は慌てて部屋を出ていった。

しかし、二人は気づいていなかった。

もうすでに手遅れである事を……。

## 第4話 消えたなのは（後書き）

また短い話になりました

暫くはなのはがいなくなってからの影響を書きたいと思います

## 第5話    なのはの行方（前書き）

第5話です、今回もなのはは出てきません

## 第5話　なのはの行方

### 【ハラオウン家】

フェイトから『なのは失踪』の報告を受けたクロノは、フェイトとはやてを自宅に呼んだ。

「すまないな、来てもらって。局内では流石に話せないからな。」

「クロノ、なのはの手紙に書いてあったのは……、本当の事なの？」

フェイトはクロノに聞いた。

出来れば否定してほしい。

そう思っていた。

しかし、

「……否定は出来ない。」

クロノの返事は曖昧な答えだった。

「つまり、管理局が裏で悪さをしとる、という訳か……」

「あくまで噂だが……、上層部が私利私欲に走っている、と聞

いた事がある。」

「そんな……」

フェイトは蒼白になった。

自分達が真面目に働いている時に上層部は自らの欲の為に悪事をしている。

フェイトにとっては信じられなかった。

「とにかく、なのはやユーノに関しては僕が調査するよ、君達は六課の方に専念してくれ。」

その日は、そこで解散となった

翌日、はやては海鳴市に来ていた。

なのはの実家でもある『喫茶店 翠屋』に行く為だ。

しかし、信じられない光景を目にした。

「なんやて！閉店!？」

入口には『閉店のお知らせ』と書かれた貼り紙が書いてあった。

はやて「どないなっとなるんや……」

驚きを隠せないはやては、次になのはの行方を知っているであろう友人二人の元へ向かった

「なのはが行方不明!？」

「本当なの、はやてちゃん!？」

「ほんまや、二人もなのはちゃんから連絡はあらへんのか？」

はやては『アリサ・バニングス』、『月村すずか』に会っていた。

「連絡していても、一週間ぐらい前に電話で話したぐらいよ、ユーノが死んでから塞ぎ込んでたから」

「その時は、変わった様子とかあらへんか？」

「無かったわ、すずかは？」

「私は・・・、あっ！」

「すずかちゃん、何か知ってるんか？」

「うん・・・、お姉ちゃんと連絡が取れなくなったんだ、これって関係あるのかな」

すずかの姉、『月村 忍』は、なのはの兄『高町 恭也』と結婚している。

高町家全員が海鳴から姿を消している

はやては嫌な予感しかなかった



## 第5話    なのはの行方（後書き）

なのはは、何処に行ったのか？

もうちょっとだけ引っ張ります

## 第6話      スカウト

なのはが失踪して1ヶ月が経過した。

管理局内でも、この件に関しては極少数の人間しか知らされていない。

一般局員が動揺しないためだ。

そんな中、はやてはある人物に会っていた

「……私が機動六課にですか？」

「せや、『次世代のエース』と呼ばれているあんたに入ってほしいんや」

はやてと話しているのは『アリカ・スエイン』

本局所属の魔導士でクロノが艦長を務めている『クラウドディア』の乗組員である

実は、クロノの推薦で彼女をスカウトしに来たのだ

「一応、新人の指導も兼ねてやってもらおう、と思ってるんやけど……  
どうやろか？」

「いえ！こんなありがたい話無いですよ！管理局のエースの方々と一緒に仕事出来るなんて光栄です！」

「じゃあ、後日詳しい話するからな」

「はい！よろしく願います！」

アリカと話し合った後、はやては溜め息をついていた。

「……友達一人も救えんで何がエースや」

ボソツと出た声は風に消えていった

### 【ミッドチルダ郊外】

使われなくなった古びた工場に一人の男がトランクを持って入ってきた

この男、ロストロギアの運び屋で犯罪組織とつるんでいる

「さて、約束の時間だが……」

すると

「……約束の物は？」

どこからもなく声がしてきた

「ちゃんと持ってきましたよ、A級ロストロギア『闇の魂』をね」

「金はバッグの中に置いてある……、トランクはそのまま置いていけ」

「わかりましたよ、それじゃあ確かに」

運び屋はバッグの中にある札束を確認して去っていった

運び屋が去っていった後、黒いマントを被った人影がトランクに近づいてきた

「これが……『闇の魂』、これさえあれば……」

声からして若い女性であろう、その人物は『闇の魂』と呼ばれる黒く光る指輪を指に嵌め込む

「!! ……感じる、今の私に相応しい闇の力を……、ふふふっ！ 見ている、管理局！ お前達に絶望を喰らわしてやるっ！」

復讐鬼『高町なのは』が静かに生まれようとしていた

## 第6話 スカウト（後書き）

いよいよ物語は本編に向かいます・・・

なのはは性格も見た目も変わっています

イメージとすればゲームに出てきたマテリアルを想像してください

## 第7話 違法研究所（前書き）

第7話です、  
いよいよ復讐鬼が本格的に始動します

## 第7話 違法研究所

とある管理世界。

ポツンと立つ大きな建物がある。

その中では今、殺戮が行われていた。

ザシュッ！

「うぎゃああああっ！！！」

ザシュッ！

「ぐわあっ！」

鳴り響く悲鳴と絶叫の嵐

「・・・」

いきなり現れたその殺戮者は、ただ無表情で、

手にしている刀で邪魔する人間達を、只の塊へと返していく。

歩みは施設の奥へと進んでいく。

そして、

ドガアアアアン！

ドアを蹴破り部屋の中に入ってしまった。

「な、なんだっ！？お前はっ！？」

中にいたのは此所の所長らしき人物。

そして、大きな水槽には幼き少女がプカプカと浮かんでいた。

「……………」

カチャリ

無表情に所長に刀を首元へつける。

「ひっ！？」

所長は悲鳴をあげた。

「……………私の質問に答えろ」

声は冷たく怒気と殺気を含まれている

「……………あの少女はお前が作ったのか？」

「はっ、はいいいいっ！」

所長は震えながら答えた。



「依頼したのは・・・時空管理局だな？」

「そっ、そうですっ！上層部の命令で・・・」

所長が口を開く事はもう無かった。

何故なら、既に首を落とされていたから。

そして、襲撃者は水槽を破壊し、少女を水槽から出した。

「うみゅ・・・、ひっ!？」

「大丈夫、貴女を助けに来たんだから」

「・・・虐めない？痛い事されない？」

「しないよ、だから安心して・・・」

「うん・・・」

襲撃者は少女を抱え施設から脱出した。

そして、

「デイベインバスター」

施設を破壊した

「・・・これで何個目？」

『100個目です、マスター』

「そっか……」

襲撃者、『高町なのは』はそのまま姿を消した……

「ただいま」

どこかの無人世界、なのははそこを住みかにしていた

「お帰り、なのは」

なのはの母『高町 桃子』が笑顔で出迎えてくれた

「その子が保護した子なの？」

「うん、残念ながらこの子だけだったんだ」

「そうなの……、あっ！　そういえば新聞にフェイトちゃん達の事が載っていたわよ」

「！　……見せて」

桃子から新聞を渡してもらい、その記事を見た。

『時空管理局に新部隊、機動六課設立』と書かれてある。

なのはは苦虫を噛んだような表情を見せた。

「なのは……」

桃子は心配そうになのはを見ていた。

「かつての親友でも、邪魔をするんだったら私は容赦しない……」

なのはは怒気を含んだ声で言った。

## 第7話 違法研究所（後書き）

なのはは違法研究所を襲撃して、子供達を保護しています、

また詳細な設定は後日載せます

## 第8話 闇の住人（前書き）

第8話になります、なのはの仲間となるオリキャラが登場

## 第8話 闇の住人

どんな場所でも、光があれば闇もある。

特に繁栄している大都市ならばなおさらだ。

機動六課設立のニュースを見た翌日、

なのはは、いつも通り違法研究所を襲撃したあと、ミッドチルダ  
ークラナガン郊外ーの古い街に来ていた。

此処は所謂『闇の市場』で、出回ることの無い、武器や道具、または情報が売りさばかれている。

当然、管理局の監視の目があるんだが、ほとんど黙認状態である。

なのはは、そんな街を歩きつつ『ある家』にやって来た。

コンコン

ガチャ

「……誰だ？」

なのはは玄関をノックした、するとドアが開き中年の男性が出てきた。

「……お久しぶりです、先輩」

「!!　．．．お前、高町か？髪型が違ってるから気づかなかった．．．、まあいい、入れ」

男はなのはの声を聞き、最初驚いたが、家の中に入れた

「噂は聞いてるぞ、最近違法研究所を襲撃してるそうだな」

男は珈琲をいれ、なのはに差し出した

「流石ですね、管理局一情報通の『バアン』元中将．．．」

「止めてくれ、もう階級で呼ばれるのは真っ平だ」

バアンと呼ばれた男は、苦笑いしながら言った。

「お願いがあります」

なのはは、真剣なトーンで言った

「一緒に管理局を潰すのを手伝ってもらえませんか？」

「．．．俺もかつては管理局の上層部にいた人間だ、彼処は根っこから腐ってやがる、今じゃあ異臭を放つ大木だ、潰すとなると修羅の道を歩む事になるぞ、それでも良いのか？」

「勿論です、初めて違法研究所を襲撃して．．．、人を殺してから覚悟は出来てます」

なのはは自分の手を見ながら言った

「わかった、だったら協力してやるよ、だが復讐は復讐としてだ、『後始末』はちゃんとやらなきゃダメだ、管理局を潰すて事は少なくともミッドに混乱を招く事になるんだからな」

「はい・・・」

「ならいい、俺の方である程度準備してやる」

「よろしくお願いします」

なのはとバアンは握手をした

なのはが去った後、バアンは押し入れに閉まってあるダンボール箱を取り出した

「こいつを見るのも久しぶりだな」

ダンボール箱にはかつての管理局時代の制服、そして自らのデバイス、『テクノポット』があった

「テクノ、起動」

カード型からその姿は剣に変わって行った

『おはようございます、マスター』



「ああ、また厄介になるぞ」

テクノから男性の声が聞こえ、バァンはそれに応えた

同時刻、クラナガンにある高級ホテル。

その最上階にあるスイートルームにパソコンの画面を見ている一人の少年がいた。

「……管理局を潰す、か、……クッフ、面白そうだね」

画面には、なのはの姿が映っていた

闇は闇を呼び起こす、

この少年もまた管理局に恐怖を与える事になるのは後の話……。

## 第8話 闇の住人（後書き）

最後に出てきた少年は、なのはの仲間となる人物です。まあ狂気が潜んでいます

## 第9話 もう一人のマッド（前書き）

第9話です、もう一人のオリキャラが登場

## 第9話 もう一人のマッド

何時ものようになのはは、違法研究所を襲撃していた。

「生命反応は無し・・・、くそっ！」

なのはは苦虫を潰したような顔で壁を叩いた。

と、携帯電話がなった。

画面を見ると知らない電話番号だった。

（この番号の事は身内以外誰も知らないはず・・・）

なのはは少し警戒しつつ、電話に出た

「・・・もしもし？」

『やあ、復讐は順調かい？』

「!!」

なのはは驚いた、復讐の事は身内以外知らないはずだった。

『驚く事は無いよ、君の行動は手に取るようにわかるんだから』

「誰なのっ!？」

『少なくとも君の敵では無いよ、なに、君の復讐に協力してあげよ』

う、て思っ  
てね』

「協力？」

『そうさ、興味があるんだっ  
たら『ホテル・アグスタ』に  
来てくれ  
たまえ、あ、僕の名前は『ノ  
ア』だよ』

そう言っ  
て電話は切れた。

「ノア……、一体何者なの？」

なのはの言葉は風の音に消  
されていた。

数日後

なのはは『ホテル・アグスタ』  
に来ていた。

（なんでこんなに局員が一杯  
いるの？）

なのはは嫌な日に来た、と思  
った。

今すぐにも管理局を潰したい、

ただ、今はノアと名乗る人物に  
会うのが目的なので、グツと堪  
える。  
フロントにノアに会いに来た、  
と言うとすぐに取り次いでくれ  
た。

そして、案内係と共にエレベ  
ーターに乗り込んだ。

エレベーターは最上階まで登っていった。

（此処はVIPルーム？）

なのはは内心驚きを隠せなかった

そして、部屋の前の扉に立ち、

「ノア様、お客様をお連れしました」

『いいよ』

ドア越しに声がした。

「どうぞ」

なのはは、そのまま部屋に入っていった。

部屋に通されたなのはは言葉を失った。

部屋の広さといい、豪華さといい、流石はVIPルームだ、と思った。

「やあ、ようこそ我が城へ」

「……子供？」

部屋の奥にいたのは9才ぐらいの少年だった。

「貴方がノア？」

「そうだよ、僕が『ノア・フォール』だよ」

「フォール……、ミッドでも有名な財閥の」

なのはもフォールという名前に聞いた事があった

ミッドチルダでも有数な財閥の一つである。

「そうさ、僕はフォール財閥総帥の孫、そして次期総帥でもある」

「その次期総帥が犯罪者に何の用なの？」

「言っただろ？協力したいて」

ノアはただニヤニヤしながら言った

## 第10話 協力理由

「……そのお坊っちゃんが私に何の様なの」

なのはは少し警戒しつつ言った。

「言っただろ？協力したいて」

ノアは知ってか知らずか相変わらずニヤニヤしている。

そして指をパチンとならすと巨大モニターが現れた。

モニターには様々な世界の模様が映っていた。

「この映像は全て今、この瞬間の出来事映している、僕が開発した通信衛星からのね」

「……あなた一人で？」

なのはは驚愕した。

幼き少年がこんな高度の高い物を作れるとは思わなかった。

「この世界は魔法社会だ、魔力の高い低いだけで評価される、じゃあ魔力の無い人間に価値は無いのか？」

「……」

「僕はずっと科学に興味があってね、勉強してきた。しかし、魔力



前提のこの世界では評価などされない、そんな価値観を植えつけたのは管理局だ、僕はそれが我慢出来なくてねえ」

「それで私に協力する、と」

「ああ、たまたま君のやってる事を知ってね、高い魔力と僕の科学力、合わせれば面白いことが出来るんじゃないかと思ってね」

「……わかった」

なのはとノアは固い握手をした

なのははホテル・アグスタを後にして一端本拠地に戻ってきた

「私も……管理局に洗脳されていた」

ベッドに横になり一人呟いた。

「……高い魔力があって『エースオブエース』と呼ばれていい気になってた」

しかし今は違う。

管理局の闇を知った今、あるのは怒りと憎しみのみ

「私は絶対に管理局を潰す、例えかつての仲間が敵になろうとも」

ギュッと握りこぶしに力を入れた。

## 第11話 聖王教会にて

聖王教会 カリムの部屋

はやては、カリムからの呼び出しで聖王教会に来ていた。

「はやて、悪かったわね、急に呼び出して」

「ええよ、六課も今の所は順調やし」

カリムは忙しい中呼び出したのを詫びたが、はやては気にしていない様子だった。

「早速だけどこの『預言』を読んで欲しいのよ」

「また新たな預言が出たんか？」

「違うわ、とりあえず読んでみて」

はやてはカリムから渡された紙に書かれている預言を読んだ

因みに預言はプロローグで書かれていた物である

「カリム、これ……」

「やっぱりわかる？これは、管理局の崩壊を言っていると思うの」

「私もそう思うわ……」

はやてはカリムの意見に同調した

そして、ある人物の事が浮かんた

高町なのは

彼女がいなくなって数ヶ月が経とうとしているが相変わらず音沙汰は無い

「はやて？」

カリムがはやての顔を心配そうに見ている

「あっ！何でもないよっ？」

はやてはカリムの顔にハツとなり慌てて首を横に降った

聖王教会からの帰りの車にて、はやてはずっと考えていた

（あの預言は間違いなくなのはちゃんの事を言っている・・・）

（だとしたら、私達となのはちゃんとぶつかる事が大きい）

（いや、あかんあかんそんな最悪や）

考えては消え考えては消えていた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2686p/>

---

魔法少女リリカルなのはdarkside

2011年1月3日21時49分発行